

平野啓一郎が語る、平野啓一郎

—20年の作家生活とその作品群

2018年に作家生活20周年を迎えた平野啓一郎氏。14歳で三島由紀夫の『金閣寺』に衝撃を受け、文学の読者となった平野氏は、21歳でデビュー作となる『日蝕』を書き、現在に至るまで様々な小説、論評を発表しています。

ロマン主義三部作を発表した第1期、短篇・実験期と呼ばれる試行錯誤を行い「新しい世界」を描いた第2期、「分人主義」という独自の思想を展開する充実した第3期、『マチネの終わりに』がベストセラーとなり氏のイメージが更新された第4期と、平野氏の小説は20年の間に変化を続けてきました。その数々の作品群と20年の作家生活を、平野氏本人が読み解きます。



撮影/瀧本幹也

2019年

7月10日(水)

19:00~20:30 (18:30開場)

千代田区立日比谷図書文化館

地下1階 日比谷コンベンションホール (大ホール)

定員

200名 (事前申込順。定員に達し次第締切)

参加費

1000円

ひらの けいいちろう
平野 啓一郎 小説家

1975年愛知県蒲郡市生。北九州市出身。京都大学法学部卒。1999年大学在学中に文芸誌「新潮」に投稿した『日蝕』により第120回芥川賞を受賞。以後、数々の作品を発表し、各国で翻訳紹介されている。2004年には、文化庁の「文化交流使」として一年間パリに滞在。美術、音楽にも造詣が深く、幅広いジャンルで批評を執筆。また、2009年から2016年まで日本経済新聞の「アートレビュー」欄を担当した。2014年、フランス芸術文化勲章シュヴァリエを受章。著書は小説、『葬送』『滴り落ちる時計たちの波紋』『決壊』(芸術選奨文部科学大臣新人賞受賞)『ドーン』(ドゥマゴ文学賞受賞)『かたちだけの愛』『空白を満たしなさい』『透明な迷宮』『マチネの終わりに』(21万部突破/渡辺淳一文学賞受賞)、エッセイ・対談集に『私とは何か「個人」から「分人」へ』『「生命力」の行方~変わりゆく世界と分人主義』『考える葦』等がある。2018年9月に新作長編小説『ある男』(6万部突破/読売文学賞受賞)を刊行。

お申込み

- ①ホームページの申込みフォーム
 - ②お電話 (03-3502-3340)
 - ③ご来館 (1階受付)
- いずれかにて参加希望の講座名、お名前(よみがな)、お電話番号をご連絡ください。

小学生以下のお子様に参加される場合、保護者の同伴が必要です。(同伴者の方にも参加費が必要です。)

主催 千代田区立 日比谷図書文化館

千代田区日比谷公園1-4 (日比谷公園内)
<https://www.library.chiyoda.tokyo.jp/hibiya/>

- 都営三田線「内幸町駅」
A7出口/徒歩3分
- 東京メトロ●丸ノ内線●日比谷線「霞ヶ関駅」
B2出口/徒歩3分
- 東京メトロ●千代田線「霞ヶ関駅」
C4出口/徒歩3分
- JR「新橋駅」
日比谷口(SL広場)/徒歩10分

